

眞宗僧伽の本質と歴史 (一)

長 峰 崇 仁

第三節 七祖の僧伽観

八宗の始祖と云はれる龍樹(一五〇—二五〇頃)は、その著「十住毘婆娑論」の第五に易行品を説いた。「大乘の菩薩が發願して仏道を求むることは三千大千世界を拳ぐるよりも重い。不退転地を得ることは甚だむつかしく、また、久しい間修行しなければ得られないことであるから、速かに不退転地に到着する易行の道があればせぬかと問うならば、それは怯弱下劣の言いで、大人士幹の言うことではないと云はねばならぬ。若し、どうしても聞きたいならば、今、これを説こう」と前置きして「信方便の易行あつて、疾く不退転地に至ることが出来る」と云い、その易行とは「恭敬心を以つて、執持して名号を称える道である」と説いた。

こゝに傾聴すべきことは、人多い中には、聖道の難行修行に能く堪えられる選ばれた人々もあるであろう。けれども自身は特別の勝機ではないと云う自覚に出発する道であり、世の万人と共に得証する道が、虔しく選ばれたと云うことである。さらにまた、仏の名号も唯一仏名があるのではない。東西南北四維上下に数多の仏しまして、諸仏各々その徳がある。その何れの仏名なりとも、望みのまゝに称念して不退転地を得よと教えつゝ、その外には道はないかと問はしめて、はじめ、阿彌陀仏の超勝独妙の徳を説き、百七仏が現に十方の清淨世界にましまして、彌陀の本願を憶念し称名するのであるから、人若の、彌陀を念じ称名すれば、直ちに必定に入り無上覚を証る。この故に憶念せよとすゝめる。また「十二礼」には「諸々の衆

生の爲めに、願力もて住す。」「往生すれば不退にして菩薩に至る」と、如来不虛作住持を説き、本願に隨順し、名号を称念する、眞実歸依に由つて、必定に入る者の僧伽の基盤が明らかにされて居る。

第二祖、天親菩薩（三二〇—四〇〇頃）は、願生偈を造り、「世尊我一心、歸命尽十方、無碍光如来」と称念し、「普共諸衆生、往生安樂國」と願生し、讚嘆供養して、淨土に往生する仏道を宣揚し、解義分を説いて、願生者の心行の構造を開示して、淨土の僧伽の規範を教えて居る。その教説に就いては、第三祖の淨土論註に尋ねなければなるまい。

第三祖、曇鸞（四七六—五四二）は、「天親菩薩は釈迦如来の像法の中にましまして、經教に順ずるが故に願生す」と仰ぎつゝ、「五濁の世、無仏の時に於いて、不退転を求むるに難し」と末法の初にある己が身に受けて立つ。「易行道は、たゞ信ニ仏因縁ニを以つて、淨土に願生して、仏の願力に乗じて、便ち彼の清淨の土に往生することを得、即ち大乘正定之衆に入る。

……蓋し上衍（上）の極致、不退の風航なる者也。」と嘆ずる。「乘（二）仏願力」と歸命するのは、即ち五念門を修することになるのであるが、歸依は禮拜、讚嘆、作願、觀察の行であるが、禮拜や誦誦等が必らずしも歸依ではない。「三界を見るに、」
 「ある國土を見るに」、「邪道の生ずる所」、「つぶさに辛苦を受く」、「優劣不同なり」と現實を内觀せしめ、衆生を不虛偽、不輪轉の処に置いて、畢竟安樂大清淨處を得しめ、不實功德を畢清淨に転成する境が淨土であると説く。即ちその内觀の場、現實を映出する場が淨土願生であり、その場に置かれて仏道を行ずる衆生の座が僧伽であることを教えられる。だから淨土の徳は僧伽に与えられて居る。眞実歸依とその僧伽を離れて淨土はない。淨土を離れて現實の僧伽もない。その依る所は唯本願力である。衆生の往相の眞實歸依の背景は、如来の還相廻向である。行として私すべきなく、徳として私すべきものはない。

だから願生者の僧伽の内徳は、淨土の菩薩功德に基いて、「不動にして法輪の転ぜられざるところなく、時として仏事の絶ゆる時なく、縁として実を結ばざるなく、人として疎外される者なし」と云うことが不可欠である。

何故なら、「大慈悲そ是れ仏道の正因」であり、「安樂淨土は大慈より生じ、大悲は淨土の根である。これを衆生界に求む

るなら、大悲摂化の僧伽の外にはない。僧伽こそ、五濁末法の衆生界に於ける大悲の浄土の現実存である。「如何にして、信を生じ願生の人となるか」と、論註卷下に問を起して、入出二門の五念を領解する。五念門を修して浄土に往生することを得るは法蔵菩薩の大願業力の所成と、正覚阿弥陀の善住持力の所撰なる、不可思議の浄土莊嚴を觀察して、眞実の浄信を生ずるに由る。浄信を生ずれば、淳、一、相統、の一心に依つて、如実修行、名義相應の眞実帰依の称名となつて、願生彼國必定得生の眞人生が始まる。これこそ現実の僧伽の基盤である。

しからば、本願力所成と阿弥陀善住持力を観知するとは如何にするかと云えば、仏莊嚴功德成就を観知することである。即ち従果向因の如來の座を離るゝことなく、衆生の虚誑の三業を治せんが爲めに、攝取不捨の光明の徳と化益無窮の壽命の徳に基き、諸仏称名、衆生生信の大悲の願を發し、莊嚴仏國の清浄の行を修して、南無阿弥陀仏と云う方便法身を成就したまえるを聞いて、衆生の宿業の底に徹到する如來の悲智を、衆生が体感正受することあることは云うまでもない。この生信願生の菩薩は末証浄心の人であつても、畢竟じて上地の菩薩と身も法も等しく、平等に同朋同行である。だから、龍樹も本願一仏乗を選んだのであると、曇鸞はこの血脈を揚幽した。

本願と五濁の衆生との間に、信仏因縁の血のつながりを認めて、法と機の座を明らかにした論註の功を、親鸞が如何に尊重したかは、自名の鸞の字と、また高僧和讃中に於いて曇鸞讃の持つ比重に依つても知ることが出来る。

第四祖、道綽（五六二—六四五）は、北周の廢仏事件の起つた翌年十四才で出家し、自國の敗亡と廢仏の勢の狂瀾の中で青年期を過した。

經典の示す如く、まさに末法時に入つた悲愴な実感があつたことは想像に難くない。大集月蔵經の説に依つて算定すれば、北齊の文宣帝の天保三年（五五三）に既に末法に入つて居る。玄中寺に曇鸞大師の碑文を見て浄土門に入り、觀無量寿經を講じて安樂集を造つた道綽禪師が「機と時と教と相背けば、修し難く入り難し。今時の衆生は、即ち仏世を去りて後の五百年に當る。正に是懺悔修福して、仏の名号を称すべき時の者なり」と、聖道の難証と浄土一門あつて通入すべきを述べて居るとこ

ろに、時機の自覚に立つ浄土門建立の悲心に接する。凡夫と聖人の別なく、仏の本願に由るが故に、心を起し、徳を立て、浄業を修すれば、皆即ち便ち往生して、大乘正定衆に入る。「末法濁世の起悪造罪は何ぞ暴風駛雨に異らん。こゝを以つて、諸仏の大慈勸めて在此起心立行の自力を捨て、本願他力の浄土に帰せし給う。一生造惡のものなれども、たゞ意をかけて専精に常に念仏すれば、一切の諸障、自然に消除し、定めて往生を得る。」とすゝめた。中國に於ける浄土願生者の僧伽は庶民を包んだ新らしい形に於いてはこの時に芽生えたのである。

第五祖、善導（六一三—六八一）は十六、七才の頃、終南山の悟真寺に入ったが、觀無量壽經を見て、時機相応する教に感ずる所があつて、二十才の頃、山西の道綽を尋ね、三十三才まで、（貞觀十九年（六四五）道綽八十四才で示寂するまで）、十年ばかりの間、膝下にその化を受けたであろう。その後、再度終南山に入つて、浄境に浄業を修したが、その間に発見したものは未代五濁の根底としての宿業の身であつた。「外に賢善精進の相を現じつゝも内に虚仮をいだく」上輩の浄居を去つて、罪濁垢穢の市井、長安の都に出て、凡夫入報の仏道、本為凡夫の教を部の道俗土庶に伝えねばならなかつた。中國の浄土教が初めて山から出たのはこの時であり、中國の仏教が正しく万人の仏教として世に解放されたのはこの時である。「統高僧伝」の筆者、道宣の言葉を話半分にきいても、阿弥陀經書写十萬部に加うるに浄土變相圖の製作と弘布は、如何に強盛な不屈な文書伝導であつたか想像に余りある。在世中、既にその化の及ぶところは、山西、陝西、河南一帶の華北の中心地帯から、遠くは湖北まで及んで居る。後世に至つては、中國の道俗の浄業を修する者で、全く善導の流に染まぬ者はないことになつたまさしく庶民の浄土教僧伽の始祖である。

著す所の五部九卷の書は、その根本教説を開示する觀無量壽經疏と行規礼法たる觀念法門、般舟贊、礼贊、法事贊である。仏教史上に於ける善導の思想的地位は、時機に立つた道綽が定散二善の自力聖道門をさしおき、念仏易行の他力浄土門に帰したその廢立の血脈を襲ぎ、さらに一層深く凡聖兩機の深底を抜く時機の自覚に立ち、行修の権實真仮の地位を分明にし、教と機の権仮を捫して従仮入真の転成過程の中にその位置を与え、古今の教行を楷定した不滅の功にある。順彼仏願の南無を機法

体の深信に基礎づけ、仏道の源を願力廻向の仏道感覺たる信樂に開顯したのである。誠に善導によつて、四海兄弟の万人平等の僧伽の基盤が開かれたと云わねばならない。

祖聖親鸞が、「善導独明仏正意 深籍本願興真宗」と云い、「大心海ヨリ化シテコソ 善導和尚トオハシケレ 末代濁世ノ夕メニトテ 十方諸仏ニ証ヲコフ」「信ハ願ヨリ生ズレバ 念仏成仏自然ナリ 自然ハスナハチ報土ナリ 証大涅槃ウタガハズ」と和讃せられたお意はこゝにある。

第六祖、源信（九四二—一〇一七）は横川に居て、若くして既に山の俊英であり、良忍の観仏三昧の伝統を承けた人である。その著「往生要集」は、日本人の著述で中国の道俗の間に異常な名声を博したものの、随一と称すべきであらうが、その内容は厭離穢土を勧め欣求浄土を教え、自ら念仏三昧を修して、祈禱と名聞利養の府と化した山に仏道行修を取り戻し、他面に於いて、当時流行した無願唯行の念仏聖に対して、静寂清浄処での観仏三昧を勧め、専修を説き、称名易行を教えた。

併し乍ら、山の常行三昧に見られる如く、観念修定の念仏が主軸であつて、つまりは聖道自力の法門から独立出来て居ない印度中国の浄土教の先達の行跡を襲いでは居るが、底下の凡夫の座が遂に穢土を厭離すべくもない逆誘闍提の座であることを未だ明らかにしない憾がある。定散と唯称仏名との別が明かでない。称名本願は聖道自力門の庇の下にある寓宗の地位を脱して居ない。「世俗の人、縁務を棄つること難くば、たゞ常に念を西方にかけて、誠心に彼の仏を念ずべし」と云い、「弥陀の本弘誓願は称名十声一声に至るまで、定んで往生を得る。』の深信釈の文を引いて、称名往相を世俗の凡愚に勧めたところに、「信心浅けれども本願深き故に」と本為凡夫の浄土真宗の胎児を宿して居る。源信の念仏の教は、平安貴族社会の腐敗自壊と京洛の治安のゆるぐ秋に当つて、現実のたのみ難いことを感じた貴賤を、能く仏道の僧伽に誘い、庶民を僧伽に包んだ。

第七祖法然（一一三三—一二二二）上人に就いては、さきに第一章第二節で取出して述べた。源信和尚と同じ横川の法流を汲み、「一心専念弥陀名号得生、是名正定業、願彼仏願故」の文に邂逅し、山を降つて、本為凡夫の浄土宗を独立別開した。真に大悲の本につながる仏道の僧伽が独立し、本願が、仏教が万人の実社会に解放されたことから見れば、法然上人こそ日本の

善導と称すべきであろう。

第三章 真宗の僧伽

第一節 親鸞とその原始僧伽

仏教の僧伽の歴史の中で、聖道門と浄土門との僧伽は、その規模と性格とその成員の地位とに於いて、著しい相異がある。前者は出家修道本位の僧伽であつて、万人の為に開放された僧伽ではない。現実の実態は、開放されないまゝに俗化して、本来の規矩を逸脱して居るのが大勢である。その中では、在家の帰敬者は畢竟するに檀那ダンナであつて、外護者、シンパサイザーであり、余程深入りしたところで、世俗生活の繁榮を計る手段方法として、仏道訓練を利用するに過ぎない様である。昔の武門の禅ムードや今の財閥や権力者等の特権階級の現世利益追求と、禪者の迎合がそれを実証する。然るに、浄土門の僧伽は道俗男女老少を選ばず、弥陀の本願に帰する願生の血に人生を行ずる者は、すべて僧伽の正員である。就中、親鸞の流を汲む真宗にあつては、僧俗在家出家の別はないのが本来である。僧ガの内と外との境界線は、唯一人一人の生活基調たる「乗仏本願力」であり、真実の共同社会の基本たる念仏の信である。

この僧伽では、師も弟子も本来特殊の階級を固めない唯の大地の人間である。凡夫の地体のまゝが如来の願力に由つて止揚され、転成されて、歩々光明の世界を歩む人間である。世に類のない良い師でありながらも、「弟子一人も持たず」と告白し「わが計らいにて念仏申させ候はゞこそ、弟子にても候はぬ、ひとえに彌陀の御催しにあづかりて念仏申す人を、わが弟子と申すこと、極めたる荒涼のことなり」と、功を仏力に帰し、「つくべき縁あらば伴ない、はなるべき縁あれば離るゝことのあるを」と、去就を人の自由任せ、「自然の理にあいかなわば、仏恩をも知り、また師の恩をも知るべきなり」と一人一人の上に願力自然を仰ぎ、ひとえに、その統率権を如来に帰属せしめたのが、親鸞聖人の念仏の僧伽である。その統率の原理は

本願力であつて、その具体的な主権は平等に一人一人の信心にある。この僧伽は本願を同じく信じ、同一念仏する凡夫の座にある普共諸衆生の願生者の縦横無尽の関連である。如何なる意味に於いても、その僧伽の体動を僭制したり、その主動権を僭取したりする人や階級の成立を、厳しく自戒し、防止したのは祖聖親鸞御自身であつた。

「一切の有情は皆もて世々生々の父母兄弟なり」の悲智に結ばれる曠劫多生の縁に、人の上に人を置かず、人の下に人を抑えず、来るを拒まず、去るを追はず、現実の諸々の世縁のまゝの中に、御同朋御同行の人の平等と自由と共生を念じた雄大な規模を持つたものが、祖聖の原始僧伽であつた。その鑑は広大無辺際の浄土の莊嚴功德であつて、その本である本願の業因がこの僧伽に信証されて、その血となり、肉となつて居たと云わねばならない。その消息を祖聖の関東の僧伽に見ることが出来る。世の如何なる集団でも、その成員間の利害得失の相反しない間は、風薫るやうなものがあるが、一朝得失相反することになつたり、外難におのゝくことになれば、忽ちにして、骨肉相喰む利益集団の本性を曝露する。祖聖御歸洛後の常総野の念仏の僧伽にも娑婆の風は吹いた。現存する消息類の上にも、一念多念、造悪無碍、神仏輕賤等の動搖を知ることが出来る。先輩知友の研究に依つて、粗拙ながらも貧しい体験を通して、次の様なことがわかる。

祖聖が身を以つて辺地の人々と共に暮らされた間は、智慧浅く愚痴極りない田舎の人々も師の身口意三業に溢れる香光に接して、自然に微妙の法音を聞いたであろう。中には聞き得て往生決得した幾多の明法房があつたようである。併し、時が時であり、土地が土地であつて見れば、都ですら人心安んずる暇もない時勢のこと、田舎は田舎で、土豪韜を競い、庶民は揺れて止まぬ大洋の濤にまかせた底の藻草の様に、素樸な権勢と迷信の中で、ひたすら情勢適応の本能的感覚を便りに、農耕其他の営みに追われて居たであろう。衣食住は是非なく身辺の権勢に制せられ、心は暗い運命論に閉ざされて、卜占祈禱に玩弄された封建社会に、鳥かけの入り海の様に、信仏因縁のふところに念仏の燈が輝いて、人の世界らしい希望と生氣を取り戻したであろう僧伽が育つたのだが、やがてその信の燈の源が、その土地を去つた後は、残つた多少の燈も、また吹く風にゆらいで点滅したであろう。そのために、遙かに「十余国の境を越えて」身命をかけて都の師のもとへ、次ぎ次ぎと訪ね上る人々があつた。

また、書面を以つて質疑応答が重ねられた。その消息類の中に、その僧ガの内憂外患とそれに対する親鸞の態度を見ることが出来る。「萬の神祇冥道を侮り捨てたてまつると申す、此の事ゆめゆめ無きことなり。世々生々に無量無辺の諸菩薩の利益によりて、萬の善を修行せしかども、自力にては生死を出でずありし故に、曠劫多生のあいだ、諸仏菩薩の御勧めによりて、今、もうあい難い彌陀の御誓にあいまゐらせて候御恩を知らずして、よろづの仏菩薩を仇に申さんは、深き御恩を知らず候べし。仏法をふかく信ずる人をば、天地に在します萬の神は、影の形に添える如くして、護らせ給う事にて候えば、念仏を信じたる身にて天地の神を捨て申さんと思うこと、ゆめゆめなきことなり。……詮ずる所は、虚事を申し、僻事を事にふれて、念仏を当めんとする所の領家地頭名主の御計ども候うらんこと、よくよくやうあるべきことなり。……念仏する人を誹る者をば、名無眼人と説き、名無耳人と仰せおかれたることに候」と懇切に論し戒めて、内外両面を教誨して居られる。眞実無私の精神開發の聖業の進むところ、何時も遭遇するのは、俗権の鋒を執り、無智の邪衆を楯として、執拗に襲う提婆守屋の抵抗である。排仏ムードは今も昔も変りはない。誠に「一称南無 是太子恩」の感慨は深い。

さらに、当時の関東には、修験等の現世利益の根は深かつた様であるし、やがて後には、法華題目を振りかざす新しいフアジズムも入込んだであらうし、心ない人々は「地獄極楽たと証拠もない妄説を構えて愚民をたぶらかす」だとか、「口に念仏を称えたからとて貧乏しない訳でもなからう。」とか、口を極めて批難もし、攪乱もしたに相違ない。土地に残つた僧ガの長老達の苦心の程もしのばれる。よくも荒れすさぶ魔風を凌いで、病がなおるとも云わず、金がもうかるとも連がよくなるとも云わずに、「唯念仏して弥陀に助けられ生死を出づる」と教える僧伽が育つたものだと思われる。

御帰落後の関東を案じて、長子善鸞を関東に送られたが、その志は裏切られ、老の涙を払いつゝ、血を分けた善鸞を義絶しなければならなかつた。痛々しい身の宿業を思う中にあつても、「念仏止めん人こそ如何にもなり候はめ、申したまう人は何か苦しく候べき。……そのところに念仏の弘まり候はんことも仏天の御はからいに候べし。慈信坊（善鸞）がやうやうに申し候なるによりて、人々も御心共の様々にならせたまい候由承り候。返えすく不便のことに候。ともかくも仏天の御計に任

せまみらせ給うべし。」と諭し慰め、「慈信坊が申し候事を頼み思召して、これよりは余の人を強縁として念仏をひろめよと申すこと、ゆめゆめ申したること候はず。極まれる僻事にて候。……御耳に聞きいれらるべからず。」と、厳しく僧ガの爲めに心を砕いておいでになる。まことに、本願に順ずるほかに、私心の影を宿どす何事も無い。「仏法弘まれ、国安かれ」と一筋に念じて居られる租聖に接することが出来る。

この師あればこそ、遠く距たる関東の山野には此処彼処の如来堂や太子堂に、月々の縁日や法然上人の御命日に、その処の長老を中心に聞法念仏の集いが続けられた。その集いや道場の経営の爲めに持ち寄つた「念仏のすゝめのもの」の一部は、都の師のもとにとゞけられた。真宗の僧方はこうして全く自然に法爾に、大經所説のまゝに成立したのである。

真宗の僧ガは最初から在家生活のまゝ、妻を持ち子を養い、農耕を営み、あぎないをし、獵すなどを職とする人々が、願生浄土の人生を共にした協同体である。勿論、専ら聞法と伝道に身を捧げる僧形の人もあつたし、歎異鈔の作者程の学問的教養のある人もあつた。けれども、僧ガは誰のものでもなく、御同朋御同行皆の僧ガであつた。

道場が出来、御同朋の数が増せば、日常の世話も多くなり、誰かゞ道場の仕事に専従することになるのは必然で、その子孫がその仕事、その職を世襲すると云うことゝは別である。専従職の世襲と云うことは、法を血脈とする僧ガに、本質的に自然に始まつた筈はない。その証拠は、後に挙げる京都の本願の留守職のことに就いてさえ、覚如上人が祖聖の直弟子達に渡された約定の内容が、如何に厳しく主権の所在に就いての祖聖の御遺訓を仰いで居るかを見れば明らかである。道場や僧ガの統率権が血脈世襲されるに至つたのは、ずつと後世のことであるに違ない。

今日では、真宗と云えば、本願寺の門末だと考えられる程に、それは本願寺教団に代表されて居るが、その本願寺とその教団は、如何にして、如何なるものとして成立したのであろうか。

大谷本願草創の地は、正嘉二年（一二五八、祖聖入滅前四年）小野宮禪念が購い取り、文永九年（一二七二、祖聖入滅後十年）に祖聖御遺骨をこゝに移し、草堂を作り、祖像を安置した。これは顯智等遺弟の営むところである。文永十一年（一二七

四)この地を禅念から覚信尼に譲り渡され、翌年禅念歿し、覚信尼は留守職として、覚恵、唯善と共に此処に居る。建治三年(一二七七)覚信尼は此の土地を本廟に寄進して、留守職は覚信尼の子孫が之を継承することとし、その人に就いては、祖聖の遺弟等が之を選ぶと云う約束が成立した。留守職は廟守であつて、僧ガの統率者でも、教導者でもなかつた。弘安六年(一二八二)十一月、覚信尼の臨終に事実上留守職は覚恵に譲られた。その後、正安三年(一三〇一)、山の源伊や唯善(禅念と覚信尼との間に生る)との間に紛争がおこり、覚恵は本廟は門弟等(祖聖の)に帰すべきものであるとの亀山院の院宣を受け、遺弟等の協力に依つて、覚信尼歿後十九年目に、漸く留守職継承の承認を僧ガに受けた。同年留守職讓状を覚如に与えたが、翌年には鎌倉幕府の一向宗禁制の機に乗じて、僧ガの領導権を握ろうと企てた唯善との紛争がおこり、ふたたび遺弟達に協力を仰いで徳治三年(一三〇七)の檢非違使庁別当宣や、延慶二年(一三〇九)青蓮院での唯善との対決を経て、漸く本廟は安泰に歸し、覚如の留守職も僧ガに承認を受けることが出来た。祖聖入滅後四十七年に至つて礎は安定したのである。この時に覚如が祖聖の門弟達に渡した約定書は次の通りである。

「親鸞上人御門弟御中江 令懇望事条々事

一、毎日御影堂御勤不_レ闕怠_一事

一、不_レ可_レ背_二財主尼覚信建治弘安寄進状_一事

一、自_三御門弟等御中_一 縦雖_レ被_レ申_二付御留守職_一 於_レ相背御門弟御意_二者 雖_レ為_二一日片時_一 被_レ追_二出影堂敷内_一之時
不_レ可_レ申_二言子細_一事

一、御門弟等 忝被_レ賜_二兩御代院宣並并裁_二一本所成敗之上者 雖_レ為_二留守職_一 一切不_レ可_レ申_二子細_一事

一、於_二向後_一者 任_二本所成敗之旨_一 不_レ可_レ背_二御門弟等_一事

一、聖人御門弟等者 縦雖_レ為_二田夫野人_一 任_二三師之遺誠_一 全成_二蔑如之思_一 不_レ可_レ致_二過言_一事

- 一、雖_レ被_レ申_二付_一影堂留守職一 全_二不_レ可_レ成_二我領之思_一事
- 一、自_二御門弟御中_一 賜_二御狀_一之時 以_二彼文章_一 備_二後日之龜鑑_一 不_レ可_レ申_二子細於_二御門弟御中_一事
- 一、影堂敷内仁 招_二入好色傾城等_一 不_レ可_レ酒宴_一 自他共可_二禁制_一事
- 一、不_レ蒙_二御門弟御免許_一 無_二左右_一罷_二下_一向_二諸國_一 或称_二勸進_一 或号_レ不_レ諧_二定員數_一 不_レ可_レ奉_二御門弟_一事
- 一、奉_レ對_二諸國御門弟_一 不_レ可_レ称_二有_二忠節_一由_一事
- 若偽申者 惣_二三朝浄土高祖 別蒙_二祖師聖 人之冥罰_一 而可_レ失_二現當之悉地_一
- 仍為_二夫未之龜鏡_一狀如件

延慶二季_巳 酉 七月二十六日

覺 如

この状に依つて知られることは、先づ第一に本廟及び教団の主権の所在である。主権が祖師聖人の御門弟にあり、同一念仏の御同朋御同行にあることは明瞭である。第二に留守職の本務と地位と分限である。その本務は御影堂の御供事である。その地位は御門弟達の留守を護る代理である。その分限は教団の成員の何れの一人とも同格の願生の凡夫である。上でも下でもない。第三は留守職の義務権限である。祖師聖人の御遺誡に基き、たとえ田夫野人たりとも、本願を信じ念仏する人は、祖師聖人のとも同行であるから、決して粗略軽賤の思があつてはならない。と同時に本廟経営上の教団の経済的負担を専決し、強請してはならない。第四には、留守職任免の権限である。覚信尼の創立当初の約束に由つて、留守職はその子孫が継ぐが、その人の撰択決定に就いては、御門弟の承認を要するので、その承認が取消さるゝ場合は何時なりとも退出せねばならぬと云うことが、祖意にかけて誓はれて居る。

祖聖を敬重する御門弟と祖聖の血を分けた子孫との間で、互いに敬愛の念に結ばれた中で、これ程の厳しい遠い思慮がなされたと言ふことは、その底に、当時の様々の現実を想像させられもするが、基本的には、唯一つ、祖聖の御みちびきに依つて本願の一念に帰する者の僧ガ形成の根本精神を、具体的にあきらかにして置こうとする志を見逃がす訳に行かない。

誠に、祖恩を思うものゝ情として、遺された唯一片の紙といえども粗末にしたくないのが常である。況んや、現世の血液の延長として現在するに何をか云はんやである。恩師の跡に、その志を継ぐ人あれかしと願はぬ者はない。併し乍ら、厳しい人界の現実、法脈と血脈と、遺志と遺体と、その所在を異にすることが少なくない。善鸞義絶の事實はこの悲しい人の世を実証して余りある。仏教史上未曾有のこの問題が、真宗の僧ガには宿業として課せられて居る。この時の覚如上人の御深慮を忘却してはならない。

本廟草創の根底に見ることの出来るものは、祖聖の法脈と血脈とが相助成して、人間の血の現実結びついた祖廟の相統原理の樹立である。忘るべからざること、教団即ち僧ガの統率権乃至主権は御同期御同行にあることが認められてあると云う由々しい事実である。御遺誠が生きて居る。

改邪鈔に覚如上人は「浄土の一家に於いて同じく師資相承の血脈あるべし」と云う撰撰集の文を引き、血脈とは「往生浄土の心行を獲得する」相承のことであることを諷明、法然上人を「曾祖師」と称し、親鸞聖人を「祖師」と称して居る。従つてこの血脈には「弥陀の本願は仏智他力の授けたもう所なり。然れば皆、とも同行なり、私の弟子にあらず」との法血が遍く流れて、「互に迎崇の礼義を正しくし、昵近の芳好をなすべし」が真宗僧ガの本道で、之に反すれば「祖師先徳の御遺訓に背くことを明らかにしておる。すでに本廟の性格がこの通りだから、各地の道場に至つては尚さらである。」「為凡をさきとして之を構え、本尊を安置したてまつる」ので、行者集会の爲であるから、遠近便宜それぞれ宜しきに従つて「あまた所にも道場を構うべし。」「同行は四海皆兄弟の誼をなすべきに、簡別隔離せばおのおの確執のもと、我慢の先相たるべき」と誠められるを見れば、地方の道場にも既に法城をかためて割拠する人師の私領化が出現したのであるか。

かの留守職に関する約定書を御門弟中に渡した覚如上人四十歳の頃から、二十八年後、建武四年六十八歳で改邪鈔を作るまでの間にすら、既に真宗の僧ガに発生し得べき宿命的な事態も芽生して居たのであろう。

この事は、基本精神は実に明瞭判然たるに反比例して、その現実の規制力が末だ客観的、組織的、社会的となり得ないで、日本の社会の深い封建性の中に放置された結果であろう。この原始僧ガでの憂慮は、今日の真宗にとつて貴い鏡である。

第二節 蓮如の僧伽大成

本廟の基礎はかくして定つたのであるが、南北朝から室町時代義政の頃まで、落葉くゞる水の様に全く衰微の歲月を送り、第八世、蓮如（一四二五—一四九九）に至つて、漸く大本願寺僧伽を成すに至つた。覚如の長子存覚は六要鈔浄土真要鈔の著者として知られるように、立派なひとかどの学者であつたが、父子の間に疎隔があつて義絶の憂き目を見た。そこに何か教团的な問題が伏在して居たやうに思はれてならない。南都北嶺の既成教権の理不尽な抑圧は勿論のこと、内には既に本廟中心の勢力と直弟子系勢力の対立もあり、その現実認識の深淺や情勢対応の感覺の相違の故に、骨肉の不和を招くことは史上しばしばあり得たことである。

ともかくも本廟を支える底辺は次第に狭小になつて、その後、善如、釈如、巧如、存如の四代、百余年の間は僅かに本廟の滅亡をまぬがれたに過ぎない。

「児の御一代に聖人の御一流を再興したまえ」と告げて、六歳の布袋丸を遺して何方とも知れず去つた慈母の悲願に護り促されて育つた蓮如上人は、初めから、真宗の法脈を継いで、衰えた本廟の法灯を輝かさねばならぬ命運を享けて居た。「二、三日も御膳もまいり候はぬ」程の窮乏の中に、「京の黒木をすこしづゝ御とり候て、聖教など御覽候由に候。又少々は月の光にても聖教をあそばされ候」と伝える程に、臥薪嘗胆、祖聖の精神を継承する為に、千辛萬苦した。永享三年（一四三一）十七歳で青蓮院に剃髮し、天台の門侶として諸教を研尋し、大乘院経覚について法相を学び、研讀至らざるはなかつたが、唯、

祖聖の御精神と相距ること遠きに心滿たず、遂に自ら御本書や六要鈔の祖典についてその精隨を求められた。かくして、三十歳の頃にははや御一流の精神に体達されたと言ふ。

そこで先づ文安四年（一四四七、三十三歳）には関東の祖跡を訪ね、二十四輩等の跡を復興して帰京し、宝徳元年（一四四九、三十五歳）には北陸の祖縁を暖められた。かくて、上人を中心に、本廟は、本願他力の心行に結ばれた僧伽の体を復興し始めた。

上人の教化開発の活躍を述べる暇を今は持たないが、最も注意すべきことは、大谷本廟が山の暴徒に破却されて後の、近畿、東海北陸等の周辺辺境の開発である。山の権勢に対抗したり、既成教団の肅清や刷新の爲めにその勞を用いることなく、専ら精神的未開の原野に働きかけたことは、何か後世に考えさせるものがある。

寛正元年（一四六〇、四十六才）から文明三年（一四七一）まで十二年間は、東山、金ヶ森、堅田、大津辺を転々し、山徒等のわざわざいを避けながら、一流再興に骨身を削り、東海あたりまでも脚を運んだが、応仁の乱以来は、京洛の情勢に深く思を決する所があつて、文明三年（一四七一）初夏、遂に祖像を大津の門弟に托して北陸に向つた。

ここで、中央の戦乱をよそに、祖教を現実に証明し、また支えもする法の国土を拓く意気込で、教団の開拓拡大育成に経綸を行つたものと見える。守護朝倉敏景夫妻をはじめとして、あらゆる地縁人縁を掌握し、血縁を要処に配し、能く乱世に平安の世界を築き得た力量は全く偉傑を見る如き驚異に値する。だが、勿論、唯の英雄ではない。その性格を具象するに充分な証績がある。文明三年秋に當まれた吉崎御坊を訪れる人の耳目に、今日必らず触れるもの、それはかの肉づきの面のくしき名物物語である。思えば、よくも彼の辺境に、ありし日の田舎の粗朴で頑迷な生活に、あの物語の生まれる程に念仏が浸透して、血肉のついた姑や嫁の鬼面を誠にあざやかに生産したものだと驚かざるを得ない。目に一丁宇もない賤が伏屋にまで、如来の悲智の心行が伝つた証左ではないか。加越能の教勢の偉を語らずとも、肉づきの面を聞けば上人の偉大さを知るに充分である。「この一流のうちに於いて、しかじかとその信心のすがたをもえたる人これなし。かくの如きのやからは、いかでか報土の往

生をばたやすくとぐべきや、一大事と云うはこれなり。幸に五里十里の遠路をしのぎ、この雪の中に参詣のこゝろざしは、いかようにこゝろえられたる心中ぞや。千萬心元なき次第なり」と〇め、「他力の信心と云うことをしかと心中にたくわえられ候て、そのうえには、仏恩報謝の爲めには行住坐臥に、念仏を申さるべきばかりなり」と諭された。上人の教化は、「帰命の一念」「他力の一念」の一つに収まるが、これを観念化して、信条信仰とする自力のはからいは今も昔も変りないが、当時もそれを楯とし、六字をかくれみものとして、自損毀他する心得違ひも少なくなかつたであろう。「信もなき衆生のむなしく地獄におちんことをかなしみおぼしめして、これを何としてもすくわんがために神とあらわれて、いささかなる縁をもて、それをたよりとして、ついに仏法にすゝめいれんがための方便に、神とあらわれたもうなり」。だから、衆生が弥陀をたのみ、信心決定、念仏相統し、極楽に往生する身となれば、諸神諸仏も守護地頭も、よろこんで念仏の行者を守護したるべき道理であるといふと外とを同時に論すところには、正しく祖聖の正統を継いで、封建乱世に処する偉哲の風格がある。

事志と違つて、僅か四年で、一揆の頰を避け、心ならずも北陸の門徒を後にして、畿内に帰り、出口、山科、大阪等々に転出して、各地の開発に力を注いだが、北陸と雖ども、そのまゝ上人の手を離れたまゝではなかつた。また遠くは九州までも、その弟子をして開教させて居る。その化の及ぶ地域の広汎であると、都鄙の貴賤貧富の各階層に及ぶ点では、実に真宗僧伽の大成者であるばかりでなく、全仏教史上空前絶後の業績を荷う人である。

併し乍ら、上人と祖聖親鸞とを対照する時、少なからずその風格の異なるを感ずるのも無理ではなからう。先づ第一に、祖聖の場合にも「念仏ひろまれ、世の中安穩なれ」と思召さぬではなかつたが、偏に内観的で、終生、一字の廟舎たりとも、手づから御建立になつたと云うことはないであろう。蓮如上人は、数人の夫人との間に二十余人の子女を生し、血縁を要処に配して、或は寺院を補強し、或は世俗の強縁を以つて教団の守護を計つて居る如く、時勢に適應して法灯をかゞやかす努力を致して居られる。第二には、従つて、祖聖は自ら愚禿の身の宿業に、深かく深かく如来の勅命を聞く一筋に終始して居られるが蓮師は、教化と僧伽の強化に身を捧げて、一筋に報謝に命根を燃やし尽した。その爲めに、今日世評は、祖聖により親しく

運師を敬して親しみ難いものを感じしめる。この事は、その人の時と環境と歴史的地位に由来し、時処位の縁に逆ろうて存在し得られぬ人間の歴史性を示すものに外ならぬ。相承された法の血にいさゝかの相違はなくとも現はれる花の青白紫黄である運如上人は生れ出でた最初から、祖教の興隆と本廟の復興と云う大任を荷負して居る。幼い頃から人の世の苦難を身にしみて味い、群雄蜂起する封建乱世の怒濤を乗り越えて、法灯を民心開発の僧伽にかゝげたのである。血縁も世縁もあげて教化に捧げ修羅の巷の堡壘としたことは、必要にして止むを得ない自然の勢であつて、誰が之を講議することが出来ようぞ。それだけに上人は、御同朋御同行を如來の客人であるから、決して粗略にしてはならぬと、常に自他共に誠め、その坊舎に上壇を除く等私心なき十方衆生の念仏の僧伽に心を砕いて居る。功成り名遂げた人の容易に出来る所ではない。

上人の御文は、用語甚だ簡明で、通俗であると共に、多くは対機說法であるので、五百年の語感のへだたりもあつて、今日の吾々には誤解されやすい。上人は祖聖親鸞以前の厭世主義的未來往生の实体淨土思想に逆戻りしたと評する人すらある程であるが、よく「御一代問書」等を通じて、上人の用語を了解し、上人の説話を身読するならば、おのづからこの疑難は解消する筈である。「後生御助け候らえ」は、「生死を出で、必らず仏心になる」今の眞實の心行である。

唯、覚信尼や覚如上人の頃とは違つて、僧伽の規模も次第に大きくなつたので、おのづから本廟本願寺に僧伽の人心が集つた。中央集権のたくらみからでなく、本廟崇敬と輩師慕慕が一つになつて、雪の山野を越えて来る赤尾の道宗や、大和葛の山奥から馬に薪を負はせて日返えりする清九郎の如き人々が上人に結ばれた僧伽が展開した。本廟以外の、祖聖の直弟子直系の僧伽も、自然にこの僧伽に流れ込むに至つたであらう。従つて、眞宗僧伽の主権も教権も本廟に移つたかの觀を呈したのであるが決して主権が原則的に留守職に移つたのではない。その懸念はあつても、運師自身の信心の智眼が之を照破して居る。

むしろ、主権の偏在と僧伽の変質硬化はその後の時代に根ざすことである。(つゞく)